

# 「芸術と科学の杜」を始めとする 名古屋市科学館の協働・連携事業

名古屋市科学館 学芸課学芸係長 鈴木雅夫

## 1. はじめに

名古屋市科学館は改築整備の基本方針の一つに「連携する科学館」を掲げ、平成23年3月にリニューアルオープンした。今回の研究発表では、旧館時代から続く「連携事業」、新たに取り組んできた事業等の概要を紹介させていただく。また、改築事業の方針の中に「地域を活性化させること」も目的としていたことによって新たな連携を生むことになった経緯を述べる。最後に、地域の活性化として実際に事業として行っている例を、市美術館・地域商店街等の協力の下で始めた「芸術と科学の杜」事業として紹介する。全国的にも科学博物館施設の連携事業は多数実施されていることを理解しているが、地方公共団体直営の館という制約が多い中での取り組みが、全科協加盟の科学博物館運営の参考として役立てばと願っている。

## 2. 当館が設置されている地域特性

名古屋の立地について改めて要点のみ述べると、東海地区で最大人口の都市であり、工業製品出荷額が全国一である愛知県の県庁所在地である。地域の特色として、自動車産業を始めとしたものづくりが盛んで、近年は国産ロケットの製作に加え新たに純国産ジェット機の製作も始まるなど、航空宇宙産業も盛んである。

当館は名古屋市の鉄道の玄関口となる「名古屋」と中心市街地である「栄」の中間、「伏見地区」にある都市公園「白川公園」の中に位置する。この地区には金融・証券等の営業所等も多く、名古屋・栄と並ぶビジネス街であるが、名古屋から栄までつながる通りに沿って、旧来の問屋街・商店街も残っている。また、白川公園には同じ名古屋市直営の名古屋市美術館があり、同じ伏見地区に中部電力が設置・運営している「でんきの科学館」、名古屋市環境局が運営している環境学習センター「エコパルなごや」といった環境、科学系の館も存在する。

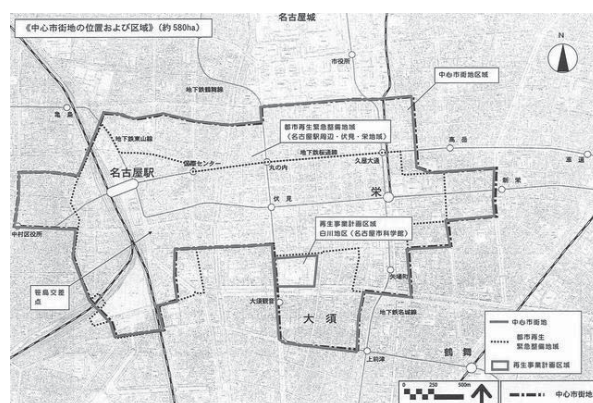


図1 中心市街地

### 3. 従来からの連携、企業等との新たな連携

昭和 37 年に旧天文館、昭和 39 年に旧理工館、平成元年に生命館と順に拡張してきた当館の歴史の中で、時代に合わせ、地域性を活かした企業関連の連携事業を行ってきた。開館当初の昭和 41 年に「豊田佐吉生誕 100 年記念展」、昭和 43 年に「電力王福沢桃介生誕 100 年展」を開催しているが、現在活動されている「トヨタ産業技術記念館」「トヨタ博物館」「でんきの科学館」という企業立博物館が無い時代に、当館と企業が連携して展示会を実施した例と言える。

先の改築の際も多数の企業から展示協力をいただいたが、この地域における当館の「科学・技術の教育・普及」の役割をご理解いただけたからと考えている。そして、企業または企業連合との連携事業も旧館時代からいくつか実施してきた。日本鉄鋼連盟との「鉄の不思議教室」、中部原子力懇談会との「放射線ウオッチング」、日本写真協会との「夏休み親子写真教室」等であり、これらは改築後も実施している。

新館開館後は、電池工業会との「名古屋電池フェスタ」、ソニーイーエムシーエスとの「レッツ・サイエンス」、日本アイビーエムとの「トライサイエンス、ロボットを作って動かそう!」、株式会社ハセガワとの「夏休み親子プラモデル教室」、中菱エンジニアリングとの「ロケットと宇宙のひみつ、講演会」など新たに実施した。これら企業や企業連合との連携は基本的に企業側から連携事業の話が持ち込まれ、企業の C S R (corporate social responsibility) 活動と当館の教育・普及活動の理念の合致を確認し、実施している。連携先の企業は、地域の企業とのケース、本社等は他府県等他の地域で実施してきた事業を新たに名古屋で実施する際のパートナーを当館にしたというケースもある。この様な提案は、改築によって当館の知名度が上がったことによる効果が大いと考えている。旧館時代は夏期だけ実施していた「特別展」も改築後は年 2 回実施の予算をつけた。特別展はマスコミ等と共催事業で実施するため、今まで連携を実施していなかった複数の在名マスコミ事業部と連携に至り事業の実施ができています。

また、当館の展示に多数の企業協賛を得ていることから、館全体にはネーミングライツ制度を導入しなかったが、「プラネタリウムドーム」だけ部分的にパートナーを募集した。その結果、ブラザー工業とネーミングライツパートナーシップを締結している。このブラザー工業との連携事業も年間複数回実施している。

### 4. 従来からの連携、研究機関等との新たな連携

理工系の研究機関との事業連携も旧館時代から名古屋大学理学部、中京大学人工知能高等研究所等と主にセミナーや講演会という形式で行ってきた。また、名古屋大学博物館とも共催で教室を実施するなどの取り組みを行い、市民向けの教育・普及事業の充実に貢献していただけてきた。そして、改築がこの地域で航空宇宙産業への注目が高まってきた時期と重なったこと

も有り、宇宙航空研究開発機構（以下 JAXA）とは「展示品」を通じての連携を深めていった。これら研究機関との継続的に行ってきた連携は、特にお互いの実績として記録に残すため、また、改めて広く市民に知ってもらうために「正式な連携協定を締結」することにした。調印・協定書の交換という形式をとることで、一部の式典はマスコミでも取り上げていただいた。平成 23 年 4 月に国立極地研究所、平成 24 年 3 月に名古屋大学理学部、平成 24 年 5 月に名古屋大学情報文化学部、平成 24 年 7 月に JAXA、平成 25 年 3 月に名古屋大学博物館、平成 25 年 9 月に中京大学人工知能高等研究所と協定を締結した。ところで、大学の協定先はあえて大学全体では無く、学部・研究所単位としている。館に対して学生の利用促進を目指して「大学」との協定を結ぶ場合など「学生が無料で利用できる」ということを運用することが多い。大学から年間契約で一定の料金をいただく場合もある。一例として、名古屋市博物館は、地域的に名古屋市立大学の近くに設置しており、大学と博物館の協定を結んでいる。しかし、当館は事業内容的に連携をしていくことを中心に考えたため、学部・研究所単位の協定を締結し事業を実施している。

また、協定の締結には至っていないが、従前からの応用物理学会の他、新たに海洋研究開発機構（JAMSTEC）、日本建築学会東海支部、科学技術振興機構、日本宇宙少年団（本部）等とは連携共催事業を実施して、多様な理工系連携事業を実施し、市民ニーズに対応している。



図2 JAXA連携調印式

## 5. 科学館改築による市街地の活性化

科学館の改築工事は、市が策定した「名古屋市中心市街地活性化基本計画」の中に「芸術と科学の杜構想推進事業」として掲載した。また、「暮らし・にぎわい再生事業」として国庫補助金も受けている。補助金の申請にあたり事業の必要性として「科学館の改築を核に公園と美術館等を有機的に連携させ、文化の創造拠点として再整備を図る」と定めている。また、区域の整備方針として「建物外でも科学館活動ができる公開空地を整備した建物配置とすることで街来者の区内回遊性を持たせ、にぎわいのある白川地区の創造を図る」とされている。このため、改築計画段階から地域との連携を重視した建築・外構整備を行った。

### 5.1 にぎわい空間を醸し出す建物

建物の外観はプラネタリウムドームを含む直径 40 メートルの球体が目立つ設計を採用した。1 キロ離れた遠くから見てもみえる球体は注目を集め、わくわく感を醸し出すことがで

きた。実際に近づいて球体の下から見上げるとその存在感に圧倒されるため、球体をバックに或いは球体を持ち上げているようなポーズでローアングルから記念撮影をしている来館者は多い。この様な建物を街の中に建築することによって、この地域を楽しくし、行ってみたいと感じさせることの一翼を担っている。

## 5.2 北側道路（長島町通り）、南側美術館との関係

球体は北側の長島町通りからほぼ正面に位置する。街の中で通りの両側にはビルが建っているため、長島町通りから見ると球体を支えている科学館の建物は隠れてみえない。この結果、空中に浮いた球体の様に見える。実際、北側から館の球体下部を通過して白川公園内にある市美術館へのアプローチも可能となった。

## 5.3 屋外展示について

大型ロケットの試験機を展示することで、地域産業の特色を活かした新たな展示を行うことになった。また、ロケットを見ながら学校団体などが弁当を広げて食事ができる空地を設けた。この場所では後に述べるイベントで大道芸などのパフォーマンスも実施して活用しており、屋外空間を賑やかにすることの一翼を担っている。

以上の様に、改築にあたっては単に館の建物・展示物の充実を図るだけでなく、文化施設として地域住民も誇ることができる様に整備することを重点項目の一つとした。



図3 科学館と美術館（約180°のパノラマ写真）

## 6. 市民参加の連携事業

当館のボランティア活動は、30年近くの歴史がある天文事業系、展示室内のものづくり事業系の二つが旧館時代から活動してきたが、新館完成を機に展示室のボランティアを導入した。3つのボランティアは大枠では「名古屋市博物館施設のボランティアに関する要綱」の中で、市博物館、市美術館と共に活動を規程しているが、実際の活動ではそれぞれ特徴がある。天文ボランティアは300名程度の参加者に天文事業を行うこともあり、組織的に連絡調整を行っている。ものづくりボランティアは簡単な科学工作を子どもたちに対して行うことが中心で教材の開発も自分たちで行い、職員である社会教育主事と相談をして決定・活動している。展示室ボランティアは1日2ないし3交代で、毎日活動している。その日にあったことを担当職員が

メールでニュースとして流している。一部有志を中心に館内利用のガイド作成等にも参画していただいている。3ボランティアは各々100名以上が登録しており、館全体ではのべ450名程の登録数である。また、今年度は「名古屋を蒸気機関車の聖地にしたい」という市長の思いを実現すべくグループが終結し、このメンバーの方々に当館で静態展示してある明治時代の蒸気機関車を整備していただくことになった。この活動も「市民と共にやる気のある人が活動できる場所を提供する」という市民連携として、今後、科学館の公式ボランティア事業として活動していただくことにしている。

以上の様な予算的に組んだボランティア活動のほか、ものづくりボランティアの有志自ら学校の長期休業時に自主的な活動を行う活動もあり、天文ボランティアは活動日以外の準備活動も自主的に行っている。子どもたちに自立式サッカーロボットの教室を開催しているが、その特別講座の講師や、大人向けの科学実験を行う先進科学塾事業の講師、展示室にある「生命ラボ」のミニ教室で行う特別講座の講師、愛知教育大学の学生が展示室にある「ミクロの実験室」で行う公開実験も実施している。まだ事業実施に至っていないが、名古屋大学の学生サークル「宇宙開発チーム」とも共催事業を検討している。この様に、科学館の公式ボランティア以外にも多くの市民が当館を活動の場として事業を実施している。

## 7. 行政としての連携

平成23年3月に名古屋市教育委員会は「名古屋市教育振興基本計画」を策定した。この計画は子どもたちの教育をめぐる環境が、少子高齢化、グローバル化、高度情報化など大きく変化していることに対応し名古屋の教育に関する基本的な計画を明らかにすると共に、生涯を通じた学びを持続する社会の実現に向けての計画でもある。その計画の中に「美術館・科学館における芸術と科学の杜」を項目として掲げたことにより、近くにあっても全く異なる分野を扱うために事業連携をほとんど行わなかった美術館と科学館との間で事業連携を行うこととなった。科学館は学芸課に普及担当の主査を置いたので、主査が中心となって美術館との連携を進めることになった。

また、行政評価の中で環境局の環境学習センター「エコパルなごや」の利用率が低いことが指摘され、市民の利用促進を目指して「科学館との連携を考える」との指摘があった。このため毎月1回「エコパルなごやワークショップ」を当館で実施している。このワークショップも元来実施はNPO組織が中心であり、市民の活動の場となっている。

## 8. 「芸術と科学の杜」事業

平成23年11月の名古屋市科学館屋外展示完成により、プラネタリウムの球体下を通り抜け、

北側のまちと南側の白川公園がつながった。これを契機として白川公園一帯を「芸術と科学の杜」と位置づけ、名古屋市美術館、科学館と周辺の商店街、文化施設等が連携して魅力ある事業を展開し、周辺地域が一体となって知名度の向上やイメージアップを図ろうとする取り組みを実施している。

平成 23 年度は、11 月に美術館・科学館スタンプラリー、白川公園彫刻観賞&科学館屋外展示解説会を開催したほか、平成 24 年 1 月 21 日には美術館・科学館常設展共通観覧券の販売を開始した。

平成 24 年度には、5 月に「芸術と科学の杜連携推進会議」を地元 4 商店街や関係機関の参画を得て設立、シンボルマークの公募決定、11 月には白川公園でのアート大会と科学館屋外展示ひろばでの出店イベント、街歩きイベントを開催した。また、周辺の食べ歩

きマップ作成（印刷費は商店街負担）、商店街街路灯への美術館・科学館特別展等バナー掲出を行った。（これに先駆けバナー設置用支柱取付けを行った商店街からは、美術館と科学館のあるまちの一体感を醸し出し、イメージアップにつながると喜ばれた。）

平成 25 年度も引き続き、街路灯バナー掲出、11 月の記念イベント開催（サイエンス&アートフェスティバルとして事業拡大）、周辺マップ作成を行った。今年度は、新たに参画した地元専門学校の働きが大きく、イベントでは動物ふれあいコーナーやキッズ向けネイルアートが人気を集め、マップ作成でも、取材・イラスト作成・編集までを担当し、地元商店街に大いに喜ばれた。

名古屋の繁華街である名駅地区と栄地区に挟まれ、やや元気のない伏見地区だが、美術館と科学館を中心に今後も連携・交流の輪を広げ、まちの賑わい創出に寄与していきたい。

## 9. おわりに

改築に伴う基本方針の中で掲げた「連携する科学館」について各種法人・組織との連携や、新たな市民連携などについて取り組んできたことを報告してきたが、全科協加盟館は地元からのニーズ、組織としての活動目的などに応えるため多くの連携をとられているであろう。当館も改築前に既に 49 年間の活動があり以前からの連携事業は改築後もほとんどが継続されてい



図 4 大道芸



図 5 美術館と連携

る。外部との連携は実際の事業で多様性を持つことができメリットも多いが、受け入れ側の体制や事業実施の際の主催者としての責任も当然発生するため「任せておけば良い」わけでは無いことは自明のことである。「科学好きの子どもを育てる」という当館の基本方針や「市民に科学を通じた生涯学習の場を提供する」という基本理念に照らした事業を多彩に展開していくためには、今後も基本的に「来るモノ拒まず」という姿勢で各種連携を深めていきたいと考えている。まさに改築というハードを整備した今だからこそ、今回の研究会テーマ「絆づくりと活力あるコミュニティの形成」が大切であると考えている。